

瑞香の詩歌

今井, 源衛
梅光女学院大学客員教授

<https://doi.org/10.15017/9437>

出版情報 : 語文研究. 76, pp.1-12, 1993-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



瑞香の詩歌

今井源衛

依田学海の妾福島瑞香は詩を作ることが出来た。我が国にも、古来女流漢詩人が少数ながら存在したことは知られており、特に近世においては、江馬細香や張紅蘭などがある。瑞香は漢詩人でも何でもない、ただの市井の、しかもかなり下層社会の一人の女性に過ぎないし、その作にかかる詩もわずか二十数首に過ぎず、細香などに比較するのも愚かというべき存在だ。しかし、もともとさしたる教養もない下町育ちの女性が学海の妾となったことで、ともかくも漢詩を作るようになり、また、学海がそのことを喜んでいた気配があることは、ここで取りあげるに値することだろう。明治初期の文化の実態のある側面をそれは明らかにすると、やや大袈裟に言えば言えるだろうか。また、瑞香の詩の内実と、それへの学海の関わりかたについて検討することは、学海を考える上にも必要であろう。

瑞香は向島の別墅で、明治一六・七年ごろから学海の妾となっていたが、その身分はあくまで「婢」であった。また、その仕事は、炊事や掃除などの雑役は他の者にさせて、彼女には主として原稿や古書の書写や清書に当たらせたい。『墨水別墅雜録』明治一八年七月二八日条に見える学海の詩に、瑞香の姿を写して「袖を捲き

て新たに磨す烏玉の玦けつ、織ほきを勞りて細かに写す錦雲の箋」とあり、また同二年八月二日条にも、学海は、

芸窓十載夫君に待し、

毎に紅箋を展じて旧文を写す

書婢纒かに能く筆墨を知れども

恨むらくは慧性無きこと朝雲に似たること（原漢文）

という詩を作っているが、その注にも「婢瑞香略文字を解す」とある。転句の「わずかに能く筆墨を知る」とか、付注の「ほぼ文字を解す」も、ともに文字は知ってはいてもたいしたことではない、という意味には違いないが、しかし、ともかくも学海の指示に従って漢文の抄写は不十分ながら出来るのだから、多分ひととおりの漢字や漢文の知識はあったものと見るべきだろう。瑞香は明治一八年には二二歳、同二年には二五歳で、一三・四歳で学海のもとに来てから、既に一〇年ほど経っている。その間に学海の傍らに在って教えられれば、かなりの学力が身につくはずである。だから、この文字はむしろ逆説的にそのことを学海が吹聴するに等しいところがあるかと思う。また、詩の結句の「慧性無きこと」が残念だといってい

るのも、馬鹿に役に立たないということではなくて、明治二〇年の三月に比狭古を産んでから、とみに「狂発」癖が昂じて学海の手に余ることが多くなったことをさしているのではあるまいか。とすれば、明治二〇年前後には、瑞香は漢詩について相応の学力を備えていたとみて良いだろう。

さて、瑞香の作った詩歌は、『学海日録』には一首も見えず、『墨水別墅雜録』に漢詩が二一首、歌が五首ある。また、それ以外に『学海記蹤』に漢詩が六首見えるが、それについては、既に拙稿「学海の妾瑞香の年齢」(国文学、平成五年六月号)に述べたので、本稿では、『墨水別墅雜録』に見られる瑞香の全詩歌について、逐次あらましの検討を加えることとした。

(一) 明治一九年八月一四日条

墨莊偶成

待兒瑞香

午夢醒來独倚欄

(午夢醒め来たつて独り欄に倚り

清風一点火雲殘

清風一点火雲殘く

当軒恰好迎涼氣

軒に当たつて恰も好し涼氣を迎へ

竹影颺々六月寒

竹影颺々として六月寒し

次韻

学海居士

荷風如水入疎欄

(荷風水の如く疎欄に入り

一枕新涼蝶夢殘

一枕新涼蝶夢殘く

夢到晁山最深處

夢は晁山最も深き處に到り

攀巖飛瀑逼人寒

攀巖飛瀑人に逼つて寒し)

この時、瑞香二三歳、学海五四歳である。瑞香が別墅に身を寄せて以来「書婢」として暮らすこと約一〇年である。瑞香が比狭古を産んだのは翌二〇年三月三十一日だから、この頃は妊娠二・三カ月で

あろう。韻は欄・残ともに平声「寒」である。学海が次韻していることから見ても、当然瑞香の詩に彼の手が加わっている疑いがあるが、その程度は判断すべき材料がない。

なお、これより先、明治一八年十一月一〇日に、学海は「瑞香に代つて岐阜燈の詩を作る」と題詞をつけて詩を作っている。それによれば、このころ既に瑞香は詩を作ることがあったと認めてよいだろう。今はそれより一〇カ月を経て、ようやく形を成した瑞香の詩を見た学海の喜びも察せられる。いずれにせよ、瑞香に無関係な全くの虚構とは思われない。

(二) 明治一九年一〇月二日。この一週間ぶりに見る別墅は、台風のために庭がひどく荒れている。その夜詩が出来た。これには瑞香の作だけが記される。

啣々吟虫露氣涼

(啣々たる吟虫露氣涼しく

秋老園林夜色沈

秋老いて園林夜色沈かなり

一痕凝目朦朧影

一痕目を凝らす朦朧の影

遠笛數声哀柳陰

遠笛數声哀柳陰し)

韻は「涼」は陽(平声)、「沈」・「陰」はともに侵(平声)で、合わない。学海の詩にも韻の踏み落しは無いわけでもないが、起句が承・結句に合わないのはやや珍しい。

(三) 同年一〇月一八日。それより以前に、岐阜の僧侶魯岳から詩が送られて来たので、学海は瑞香に次韻するように命じていたが、それが出来た。

雁声破夢一年秋

(雁声夢を破る一年の秋

藍水金華憶昔遊

藍水金華昔遊を憶ふ

残月照來薄影瘦

残月照らし来って薄影瘦せ

湘簾捲尽晚涼流

湘簾捲き尽くして晚涼流る

群材蝟集岐陽府

群材蝟集す岐陽の府

奇嶮争迎双碧楼

奇嶮争ひ迎ふ双碧楼

記得陪従当日事

記し得たり陪従当日の事

屑毫聊且写清愁

屑毫聊か且に清愁を写さんとす

これに続いて、「前韻を用ふ、学海居士」として、

天涯一別復経秋

(天涯に一たび別れしより復秋を経

不耐回頭討昔遊

耐えず頭を回らして昔遊を討ねんには

林下结交多韻侶

林下交りを結ぶに韻侶多く

幕中無客不名流

幕中客として名流ならざるは無し

藍河篝火曾驚夢

藍河の篝火曾て夢かと驚き

墨水鷓燈独倚楼

墨水の鷓燈独り楼に倚る

乍被故人寄消息

乍ち故人より消息を寄せられ

恍然呼起旧時愁

恍然として呼び起こす旧時の愁

韻字は二首ともに、言うまでもなく遊・流・楼・愁である。内容は昨明治一八年の夏、関西旅行の帰途、岐阜に一月滞在中、長良川畔の双碧楼を宿として、旧友小崎利準や岩永才太郎の世話を受けたことをいうのである。その間に出来た詩を集めて、学海は明治二〇年に『学海記蹤』と名付けて出版している。その詩集の末尾には、「記蹤付録」として編者岩永才太郎の名で瑞香の七言絶句六首を収めている。

(四) 明治二〇年七月六日。「瑞香有作」として、

雲迷万頃水遐空

(雲は万頃に迷ひて水空に遐かなり

不見漁舟鎮日風

漁舟を見ず鎮日風ふく

深鎖簾櫳烟雨暗

深く簾櫳を鎖して烟雨暗く

某声依約小楼中

某声約に依る小楼の中

学海の次韻は、

江烟点淡鎮遙空

(江烟点淡として遙かなる空を鎮し

細雨如糸冷暮風

細雨糸の如く暮風冷やかなり

不見波山十余日

波山を見ざること十余日

水神祠在水雲中

水神祠は水雲の中に在り

この二首、瑞香の作は舌足らずの感を免れないが、それなりに、詩情としてのまともは認められよう。

(五) 明治二二年五月二三日。この日朝からの霧雨がやがて細雨となり、午後には晴れた。それで、「詩有り、瑞香に示す」として、学海の詩がある。

芳事匆匆欲断魂

(芳事匆匆魂を断たんと欲す

流水落花江上村

流水落花江上の村

知是玉人訴春怨

知る是れ玉人の春怨を訴ふるを

銀箏一曲翠楊門

銀箏一曲翠楊の門)

転句の「玉人」は、瑞香を指している。明治二〇年の三月に比狭古を産んで以後、次第に瑞香の狂発がその度を増しつつあったころである。学海はそれを嫉妬の為という。この詩はそうした瑞香の気持を汲んだ作で、彼女にも我が意を知らせるつもりで見せたものらしい。その次ぎにある瑞香の詩は「遊木母寺作」と題するもの。

堤花如雪接空連

(堤花雪の如く空に接して連なる

楊柳遙看一岸烟

楊柳遙かに見る一岸の烟

淚酒王孫墓前草

淚酒ぐ王孫墓前の草

暝鶯啼繞雨余天

暝鶯啼いて繞る雨余の天)

「王孫墓」とは、木母寺にある梅若の墓のことであろう。学海の詩

と韻は合わず、贈答の形ではない。

(六) 同年五月二日。関根痴堂來訪の記事に続いて、

初夏

瑞香

陰々庭暗柳間家

(陰々として庭は暗し柳間の家

連日只聞呼雨蛙

連日只だ聞く雨を呼ぶ蛙

只見処々春色尽

只見る処々春色尽き

紫藤一架已開花

紫藤一架已に花を開く)

家・蛙・花の韻は「麻」で合っている。「只」や「々」の重複や、「呼雨蛙」の如き表現をみると、素直で、いかにも素人らしく、瑞香の作と信じさせるものがある。また、原本には、第三・四句に傍点が付されており、第二句の「只聞」はもと「不晴」とあったのを推敲訂正している。ともに学海の手によるものと認められよう。

これに続いて、「追録 霽雪樓前一海棠」と題した三首がある。その最初の一首は作者名がないが、多分学海であろう。

白桜散尽翠楊斜

(白桜散り尽して翠楊斜めなり

碧草茫茫接水涯

碧草茫として水涯に接す

也被狂風捲紅浪

また狂風を被りて紅浪を捲き

一庭吹落海棠花

一庭吹き落つ海棠の花)

起・承・結の各句、韻は「麻」で合っている。次韻ではなくとも、先の瑞香の詩が「麻」韻であったのに合わせたのであろう。次は瑞香の作。

輕風幾陣蜜蜂狂

(輕風幾陣蜜蜂狂ひ

一樹海棠花出牆

一樹の海棠花牆を出づ

独倚欄干看不厭

独り欄干に倚りて看れども厭かず

臙脂紅滴滿園香

臙脂紅滴りて滿園香ばしきを)

起・承・結の各句、韻は「陽」で合っている。この詩、いかにも女性性の作らしい発想と用語である。瑞香の作と見てよいであろう。学海はこれに次韻した。

当年莫恠放翁狂

(当年恠しむ莫れ放翁の狂せしを

紅肉朱唇短牆

紅肉朱唇短牆を圧す

莫向花前弄脂粉

花前に脂粉を弄すること莫れ

輸他清艷自然香

他を輸して清艷自然に香ばし)

瑞香の詩は海棠の花の美を称えるものであるが、学海は自身を世俗の礼法に従わない陸遊に擬し、濃粧を必要としない瑞香の美質を愛でたものであろうか。

(七) 明治二年八月一〇日。この日学海は早朝に小川町を出て、不忍池の湖心亭で蓮の花の開くのを見物した。学海の七絶に瑞香が次韻している。

風露淋漓灑曉天

(風露淋漓曉天に灑ぐ

東台朝日未昇前

東台上朝日未だ昇らざるの前

紅粧群立晨風外

紅粧群り立つ晨風の外

誰識看花人似蓮

誰か識らん花を見る人蓮に似たるを)

瑞香の次韻。

先到瑶妃池上天

(先づ到る瑶妃池上の天

湖心亭畔寺門前

湖心亭畔寺門の前

涼花露葉香三面

涼花露葉三面に香り

高捲湘簾看曉蓮

高く湘簾を捲いて曉の蓮を看る)

瑞香の詩の起句の「池上」は、原本でもと「祠」であって、それを推敲修正したものである。推敲は学海の手によるものである。 (八) 同年同月二一日。この日午前瑞香を連れて木母寺に遊び、

植半亭で昼食をとった。学海は、

蟬声揺曳送新涼

俯倚闌干午影長

無數遊魚吹浪去

穿過荷葉盪清香

瑞香の次韻詩は、

一架薔薇滿院香

散行池上倚胡床

水風陣々吹荷葉

皺作織波魚隊涼

(九) 明治三年二月六日。この日、学海は瑞香を連れて薄川

に紅葉を見物に出かけた。学海は五古一首、瑞香は七絶二首を作った。瑞香の作は、

度尽溪流水若号

滿天驚見晚霞紅

霜楓揺落秋将暮

舞破寒山一逕風

一道溪流屈曲通

滿林楓葉舞霜風

羞人誤認為醺醉

映出儂顔個様紅

韻は、紅・風・通は「東」、号は「号」(去声)又は「豪」(平声)であり、

「二道」の詩は問題ないが、「度尽」の詩は起句の韻が合わない。ま

た、「二道」の詩の転・結句はいかにも女性らしい内容である。

(一〇) 明治三年二月二十八日。「除夜」と題。瑞香の詩に学海が次韻している。

光陰如箭送流年

今夜不眠燭火前

明日欲迎東帝駕

一枝春信到梅辺

次韻

短夢匆匆又送年

梅花笑对小楼前

一枝折去投瓶裏

偏愛幽香到枕辺

韻は、年・前・辺ともに「先」である。学海の詩の結句に「幽香」とあるのは、おそらくは「香」には瑞香の意を寓したと見てよからう。除夜に際して、瑞香への変わらぬ愛のことを贈ったのではなからうか。

(一一) 明治三年九月二〇日。この日、かねてから瑞香が望んでいた江の島行に出かけて、翌日帰京した。その間、学海は詩二首、瑞香は和歌一首を作った。即ち、頭欄書き入りに、

岩間うつ波の磯辺もにぎはしく勇魚とりあてかへる釣船

その作者は「瑞氏」とある。漢詩ならば、「瑞香女史」とするところ

を、和歌だから、かく呼んだのであろう。

(一二) 明治三年二月二五日。歳暮の詩二首。瑞香の詩に学海が次韻している。

歳暮

瑞香女史

海が次韻している。

歳暮

瑞香女史

不識滿街奔走人

梅花墨水独相親

一枝乍報東皇信

琴硯弘塵坐待春

次瑞香韻

騰裏風温驟可人

烟霞江上亦堪親

垂楊欲舞梅含笑

待汝彩毫工写春

韻は、人・親・春ともに「真」である。学海の詩にいう「可人」

とは、いい人、あるいは見どころのある人ぐらいの意味らしいが、

ここでは前の詩を受けて瑞香を指すか。結句の「汝」が、これも瑞

香を指すか否か。瑞香が画を良くしたとの記述は他に思い当たる所

がない。よしんば彼女が画がかけなかったとしても、詩的表現とし

てならば、瑞香が画をかけたと解釈しても許されるだろう。

(一三) 明治二五年五月二十七日。この日、学海は西村茂樹の娘の

琴と瑞香とを連れて柳橋の植半亭で食事をした。その折りにも、瑞

香の詩に学海が次韻した。

桜花吹尽已薰風

揚柳青々江岸東

雨灑去堤遊客少

清波激灑漾殘紅

次韻

春空江雨与江風

無復遊人向水東

(識らず滿街奔走の人

梅花墨水に独り相親しむを

一枝乍報東皇の信

琴硯塵を払って坐るに春を待つ)

騰裏風温かに可人驟り

烟霞江上亦親しむに堪ふ

垂楊舞はんと欲して梅笑を含み

汝が彩毫春を写すに工みなるを待つ

韻は、人・親・春ともに「真」である。学海の詩にいう「可人」

とは、いい人、あるいは見どころのある人ぐらいの意味らしいが、

ここでは前の詩を受けて瑞香を指すか。結句の「汝」が、これも瑞

香を指すか否か。瑞香が画を良くしたとの記述は他に思い当たる所

がない。よしんば彼女が画がかけなかったとしても、詩的表現とし

てならば、瑞香が画をかけたと解釈しても許されるだろう。

(一三) 明治二五年五月二十七日。この日、学海は西村茂樹の娘の

琴と瑞香とを連れて柳橋の植半亭で食事をした。その折りにも、瑞

香の詩に学海が次韻した。

桜花吹尽し已に薰風

揚柳青々たり江岸の東

雨は堤に灑ぎ去り遊客少

清波激灑として残紅漾ふ

学海

春空江雨と江風と

復遊人の水東に向ふもの無し

单弁雖残重弁在

白鬚祠畔数枝紅

韻は、風・紅ともに「東」で、合っている。二首比較して、私は、

瑞香の作が断然優っているように感ずるが、いかがであらうか。も

し学海の助言が無かったとすれば、彼女の詩才はかなりのもので

あったと思われる。

(一四) 明治二五年九月八日。この日瑞香を連れて百花園に遊び、

聯句を作った。

氷姿玉骨春

描百美之図

幽紫澹紅秋

織万珍之錦

瑞香と二人で作ったとは言っていないが、聯句だから、その可能性

は大と思われる。

続いて、二人は後藤清平を訪問、瑞香は和歌の詠草を出して、清平

の批正を請うた。清平は当年七十二歳、学海は明治二三年七月に、彼

の歌集「賤屋歌集」の序文を書いている。瑞香はこの頃清平に就い

て和歌も学んでいたものとみえる。

(一五) 明治二六年八月二十八日。雨の中を瑞香を連れて、須崎の

松崎亭に出掛けて飲んだ。七絶各一首が出来た。今日は学海の詩に

瑞香が次韻した。

矮竹稚松緑一庭

黄痕染雨映簾青

浅斟斟酌恰応好

細々虫声小々亭

单弁残くと雖も重弁在り

白鬚祠畔数枝紅なり

矮竹稚松緑一庭

(矮竹稚松緑一庭

黄痕雨に染み簾の青きに映ず

浅斟酌を継ぐに恰も応に好かるべし

細々たる虫声小々亭)

氷姿玉骨の春

描く百美の図

幽紫澹紅の秋

万珍の錦を織る)

幽紫澹紅の秋

万珍の錦を織る)

万珍の錦を織る)

万珍の錦を織る)

万珍の錦を織る)

万珍の錦を織る)

万珍の錦を織る)

万珍の錦を織る)

万珍の錦を織る)

万珍の錦を織る)

万珍の錦を織る)

万珍の錦を織る)

万珍の錦を織る)

万珍の錦を織る)

瑞香

西風蓮謝雨余庭

(西風に蓮謝す雨余の庭

緑葉陰繁簾外青

緑葉陰繁りて簾外青し

秋到虫声易傷感

秋到つて虫声傷感し易く

思詩人在水辺亭

詩人を思ひて水辺の亭に在り)

韻は、庭・亭はともに「青」で合っている。これも、瑞香の作が学海よりも、詩情にまとまりがあるように思われる。もっとも原本には、瑞香の詩に推敲の加えられたあとがある。冒頭の「西風」は、もとの二字は難読だが、転句の「秋到」はもと「悲秋」とあったのを消して書き直したものだ。また、「虫声」の次に「逾」があったのが抹消される。

(二六) 明治二六年九月二五日。この日、後藤清平老人が来訪、瑞香は和歌二首を見てもらった。

すみだがは秋のあはれは小夜ふけて すみのぼりたる月にこそ
みれ

露を枝に結びとどめていと萩の 花はしぐれにちりすぎにけり
学海は、その翌々日小川町に帰ったが、三首の和歌を記している。

あくがれし野辺の千草はかれすぎぬ 心しづけき夕時雨かな
心してやしなひたてよ年をへて 雪をもしのぐ園のわか竹

わがやどの大和撫子おひ出ぬ たゞなよ竹を杖とたのみて
この三首は、おそらく瑞香に見せる為のものであろう。「あくがれ

し」の歌はともかくも、「心して」も「わがやどの」も、ともに幼い
比狭古の養育を瑞香に期待する意であること明白だ。この時学海六

一歳である。比狭古は時に七歳。この年の八月二九日の「雑録」に、
学海は「是より先、児比狭古(割注)「名貞美」学校に上る。字を作

ること稍良好なり。余の兒子書を善くする者無し。此れ或は教ふべき也」と記してもいる。向島に来る度に小学校に上がったばかりのこの子のことが気になったのであろう。

(一七) 明治二八年四月一六日。その月の一二日に岩永才太郎(巖山・希尹)の娘の志賀子が才太郎の姉たちとともに別荘に遊びに来て、数日間泊まっていた。今日は瑞香と志賀子とは和歌を詠み交わした。

向島の別荘にやどり侍りて

志賀子

散る花を惜しむ心や鶯の ふる春雨にたかく啼なる
故郷の花のたよりはきゝつれど 見すてかねたるすたのともが

ば、 志賀の君がかへらせ給ふをおしみける鶯のしばなきけれ
瑞香

春雨にちる花よりも鶯の 君が別れをおしみてぞなく
思ふどちまどひしてきく鶯の 声ものどけき春雨のやど

晩春に近く、雨に煙る向島の情景がしのばれるが、しかし、その翌日には、突如として『雑録』には「瑞婢暴発、制すべからず。乃ち去る」の文字が記されるのであった。

(一八) 明治二九年一月三日。元旦に比狭古が本宅に来てその家族とともに過ごしたが、この日学海は、比狭古を連れて向島に出掛けた。その途中で、迎えにきた瑞香に会い、一緒に別宅に着いた。

この日、人見景瑞から靈芝が送られてきた。学海は返礼の詩を作り、瑞香も和歌を作った。

ちりのそといつしかさけてみやまぢに きみがつみけるやまび
との芝

(一九) 明治二九年九月九日。熊本の落合東郭から来信あり、その中の詩に向島の別荘を訪れたときのこと、さらに昨年八月一七日に偶然箱根の塔沢で学海と瑞香に会ったときにも触れている。学海はその詩に次韻して送り、また瑞香にも同じく詩を送らせようとしたらしいが、結局は「侍兎に代り、東郭に答ふ」と記したあとに、絶句と律詩各一首がつづいている。

急管繁絃滿客棧

山中無復旧風流

情懷孰若村莊好

靜紫幽紅閒澹秋

(急管繁絃客棧に滿つ

山中復旧風流無し

情懷村莊の好きに孰若ぞ

靜紫幽紅閒澹の秋)

瑞香

眠鷗驚起木蘭棧

一色江天碧水遙

激灩金波迎落日

參差荇葉送風潮

写來夏素賞情足

諳誦君詩風味饒

応記西風村逕夕

騷人去後暮蕭々

(眠鷗驚き起つ木蘭の棧

一色江天碧水遙かなり

激灩たる金波落日を迎へ

參差たる荇葉風潮を送る

写し来れば夏素より賞情足り

君が詩を諳誦すれば風味饒かなり

応に記すべし西風村逕の夕べ

騷人去つて後暮蕭々たるを)

二首のうちどちらが瑞香の作であるかは、やや問題である。「瑞香」の文字の位置からすれば、当然前の絶句が学海の代作で、後の律詩が瑞香の作と察すべきか。瑞香が律詩を作った例は、既に前記(三)に見られる。もっとも律詩の文中、東郭の詩をさして「君が詩」と呼ぶことも婢の身分である瑞香としてはやや不穩な用語かと感じら

れないこともないが、学海を仲介とする瑞香と東郭との平素の親昵度が、それを敢えて許容する域に達していたということもあるかもしれない。また「激灩」の語は前記(二三)の瑞香の詩にも「清波激灩」と用いられており、作者名も、ともかくも「瑞香」である。もっとも第二句の「遙」は原本ではもと「流」とあったのを訂正したもので、その加筆は学海の手であり、こうして多少とも学海の手が加わっているにせよ、その大体は瑞香の作と見てよいのではあるまいか。韻は遥・潮・饒、いづれも「蕭」韻で合っている。これが瑞香の作とすれば、彼女の詩作の力はかなりのものと言わなければならぬまい。

(二〇) 明治二九年二月二日。この日、岩永巖山より詩が送られて来た。学海はそれに次韻して四首を返しているから、巖山からの詩も四首あったと思われる。それにつづいて左の二首の律詩がある。その一は「次韻瓊浦足立敬亭」と題した学海の作で、韻は、然・年・天・辺であり、他は、「和柳蔭先生新年和梅潭翁韻、寄其姬人瑞香君在壘上」と題したものである。この題の意味は、学海が杉浦梅潭から新年の詩を贈られたのに対する礼として、その詩に答えた詩があり、その学海の詩に和して作った詩を瑞香に贈るというのであろう。その作者の名は無い。その本文は、

君是前身姑射仙

想看風采言妍然

占米佳麗無双地

配侍名流十数年

斜抱瑤琴操月夜

輕簪彫管誘花天

(君は是れ前身姑射の仙

想ひ見る風采言妍然たるを

占し來たる佳麗無双の地

名流に配侍すること十数年

斜に瑤琴を抱いて月夜に操り

輕簪彫管花天に誘ふ

聊呈蕪什絜高和 聊か蕪什を呈して高和に絜^せべば
一笑句投粧閣辺 一笑して句を投ぜん粧閣の辺

この韻は然・年・天・辺で先の学海の律詩と同じである。その内容はもっぱら美人の瑞香を褒めたたるもの。韻が同じであることからすれば、これが先の足立敬亭から学海に贈られてきたものかとも思われるが、しかし一方、学海の詩の内容はまったく瑞香のことに触れてはいないのもおかしく、この敬亭の詩の返事としては不自然である。この詩は、瑞香あてのものだが、これとは別に学海あての敬亭の詩があったのではなからうか。その詩の韻も同じく然・年・天・辺だったと考えれば解決はつく。

(二一) 明治十九年二月二〇日。長崎の足立敬亭から詩が送られてきた。「題瑞香照影詩」とある。照影とは写真である。学海がそれより以前に瑞香の写真を送ったとみえる。前記の敬亭とのやりとりで、学海はその気になつたらしい。敬亭の詩は、

詞蕊文葩拆手中 (詞蕊文葩手中に拆き)

玻瓈玉貌更玲瓏 玻瓈玉貌更に玲瓏

向誰嬌笑瓠犀白 誰に向つてか嬌笑する瓠犀白く

瑞香吹送柳蔭風 瑞香吹き送る柳蔭の風

韻は、中・瓏・風ともに「東」である。意味は説明するまでもなく、瑞香の美貌を称え、学海を祝福したもの。これに対して、続いて学海の詩と瑞香の詩とが並ぶ。

次韻し、兼ねて鶴姐に寄す

学海居士

密麗高華四句中 (密麗高華四句の中)

擲来有響玉玲瓏 擲し来つて響き有り玉玲瓏

不知鶴駕何辺在 知らず鶴駕して何くの辺りにか在る

瓊浦秋寒萬里風 瓊浦秋寒し萬里の風

瑞香

雁書遠発海雲中 (雁書遠く発す海雲の中)

送到京城月影瓏 送つて京城に到れば月影瓏たり

起向幽庭唱佳句 起ちて幽庭に佳句を唱ふれば

林涼玉露灑秋風 林涼玉露秋風に灑ぐ

学海の詩の題にいう「鶴姐」とは、敬亭の妻のことである。これについては、「学海遺稿」巻二二に、次の詩がある。

敬亭、妓鶴姐に狎れて落籍す。乃ち前の韻を用ひて戯れに寄す。

聞道蓬瀛有女仙 (聞くならく蓬瀛女仙有りと)

丰神未接思悽然 丰神未だ接せず思ひ悽然たり

飛翔海外三千年 飛翔すること海外三千年

諳在人間二十年 諳せられて人間に在ること二十年

香熱燈昏微雨夜 香熱し燈昏し微雨の夜

鳥啼花笑有情天 鳥啼き花笑ふ有情の天

瑤台玉闕何須説 瑤台玉闕何ぞ説ぶを須ひん

琴鶴相偕絳帳辺 琴鶴相偕にす絳帳の辺り

この韻も先の詩と同じく然・年・天・辺である。学海と敬亭とはお互いに愛人のことを材料に戯れ合つたのだが、その間に、学海の意を受けた瑞香が自作の詩を以て加わっているのは、世間尋常のことではあるまい。学海が、瑞香の美と才とを如何に高く買っていたかが察せられるのである。

(二二) 明治三〇年一月三一日。この日、本田種竹が向島に來訪したが、学海は留守で、七絶二首を遺して去つた。二首ともに韻字

は涯・斜・家であり、後の一首は、

春寒流水小橋涯 (春寒流水小橋の涯)

白版門扉傍竹斜 白版門扉傍竹斜めなり

一鶴棲迹苔漠々 一鶴棲迹苔漠々

梅花開繞讀書家 梅花開繞す讀書の家

文意に紛れるところは無さそうであり、転句に「一鶴」とあるのが瑞香を指すことも容易に推察できよう。翌月五日に杉浦梅潭が別墅を訪ねて来たが、学海は留守なので、詩一首を遺して去った。

清渠明水横斜 (清渠明水水横に斜なり)

和靖宅辺停小車 和靖宅辺小車を停む

聞説主人携鶴去 聞くならく主人鶴を携へて去ると

檣頭只看老梅花 檣頭只だ看る老梅の花

この転句の「鶴」も瑞香を指すこと明らかだ。学海は彼女を連れて出掛けたというのである。続いて、落合東郭の律詩二首が並んでいるが、題詞には「落合東郭嘗て余の作に次せらる、二首」とあるので、作られたのはかなり以前のことと思われる。本田種竹の二首・杉浦梅潭の一首とともに別墅訪問の作であり、それと同じ落合東郭の作をここに集めたものであろう。その中の一首は、

蕭疎残柳晚煙痕 (蕭疎たる残柳晚煙の痕)

彷彿江南鳥夜村 彷彿たり江南鳥夜の村

青嶂数峰来画裏 青嶂数峰画裏に来り

扁舟孤棹芦根に入る 扁舟孤棹芦根に入る

何ぞ学ばん王孫返魂を解するを 何ぞ学ばん王孫返魂を解するを

尋到渠家偕隠処 尋ねて渠家偕隠の処に到れば

依然白鶴護柴門 (依然として白鶴柴門を護る)

これまた、詩意に難解の箇所はない。結句の「白鶴」は、もちろん瑞香のことである。そのすぐ後に続けて、「種竹先生に次韻す 瑞香女史」と題して、前記本田種竹の詩に答える詩がある。

垂柳如烟池水涯 (垂柳烟の如し池水の涯)

幽禽不語暮雲斜 幽禽語らず暮雲斜めなり

柴扉半鎖春風底 柴扉半ば鎖す春風の底

人與梅花冷守家 人と梅花と冷しく家を守る

涯・斜・家は、前述の種竹の詩の韻である。その翌六日、学海は瑞香とともに寺島村の梅花を見に出掛けたが、重ねて同韻(華・斜・家)の絶句を作り、瑞香もこれに倣った。

同月二八日、学海が別墅に来ると、留守中、一九日の晩に種竹が訪ねて来たとのこと。その時の瑞香の詩は、

掩門独坐对灯斜 (門を掩ひて独坐し灯の斜めなるに對ふ)

客去蕭々柳蔭家 客去つて蕭々たり柳蔭の家

想像江塘春月夜 想像す江塘春月の夜

何辺掃路見梅花 何れの辺りにか掃路梅花を見ん

韻は、斜・家・花であり、一般来の種竹や東郭らとの次韻詩の延長にあるらしい。さらに、この末尾には細字で、「此の詩一字を加へず」と注される。自分の推敲あるいは修正の手を全く加えていないことを学海がわざわざ断つたものであろう。学海が、この瑞香の詩の出来栄をいかに喜んだかが察せられる。

それに続いて、学海と瑞香とはさらに詩を詠み交わした。

余瑞香に贈るに一絶を以てす。二云はく、

改曆爾来経数句 (改曆爾来数句を經て)

改曆爾来経数句 (改曆爾来数句を經て)

満庭芳草碧痕新

不堪衰老人多病

只過梅花二月春

瑞香次韻

不奈枕床過歲句

病差可喜信書新

愁眉初展江村晚

猶有殘梅滿花香

満庭の芳草碧痕新たなり

堪へず衰老の人多病なるに

只だ過ぐ梅花二月の花

瑞香次韻

（枕床歳句を過ぐるを奈んともせず

病差えて喜ぶべし信書新たなるを

愁眉初めて展く江村の晩

猶有り残梅満花の春）

学海既に六五歳、春を迎えて、ひとしお衰老を嘆くに不足のある年齢ではない。瑞香の詩もまた、その学海の心情を汲んで、彼を慰め励ますものとなっている。次韻という形式以上に夫婦として和合した詩境が好ましく、私には感じられるのである。ここには、瑞香の「狂発」に手を焼いて、彼女をたてつづけに殴ったり、手足を縛って、頭から水をぶっかけたりという暴力行為も辞さない学海と、泣きわめいて、手当たり次第に物を投げ付ける瑞香とは全く別人の姿がある。とくに、以上に列挙して数首の学海晩年の瑞香との贈答詩には、静かな叙情と学海の瑞香に対する親和愛憐の情が感じられるのである。

ところで、右に記したような、瑞香と足立敬亭・本田種竹・杉浦梅潭らとの詩を媒介とする交渉は、もとより学海を仲介とするかりそめのものであって、彼ら男たちがどこまで瑞香をまともな贈答詩の相手と認めていたか否かは分からない。しかし、ともかくも瑞香との間に詩の贈答は行われており、しかも次韻であり、瑞香の作にはさしたる破綻もなきそうに見える。彼ら学海の友人たちも、喜んで瑞香の相手となって詩作しているらしく、瑞香を「白鶴」とか

「鶴」と言い合わせたように呼んでいるのも、その平素の親しみを物語るものであろう。おそらくは、色白く、柳腰の瑞香に鶴とあだ名でもつけていつも呼んでいたのではなからうか。これまた、瑞香の文才を抜きにしては考えにくいことであろう。

女性が漢詩を作ることは、もともと珍しいことである。その生い立ちなどにも関わらず、学海の教育を受けることによって、瑞香が以上のような才能を身に付けるに至ったことはやはり珍重すべき事実であろう。それには瑞香が生来そのような素質に恵まれた女性だったことも推測せねばなるまい。

学海が、あれ程までに瑞香に苦しめられながら、彼女をついに別墅から追い出すことが出来なかった理由には、彼女には身を寄せる家があるが、それとともに、彼女のこうした得難い才能に学海が強くひかれていた事も考慮しなければならないだろう。

そして、学海と瑞香との二人の関係の根底には、瑞香がついに終始学海の「婢」でしか有りえなかったことが決定的な事実として働いた。「狂発」する瑞香について学海は、「不遜」・「無礼」を連発したり、女の欲は始めは至ってささやかだが、恩に馴れて身の程を弁えず、しだいに際限なく増長すると嘆いている（日録、明治二一年七月二三日）のであるが、学海が瑞香を「婢」の身分に閉じ込めて置こうとする限り、解決不可能というべきであつただろう。もつとも、学海自身もその事に気がつかなかつたわけではない。彼は比狭古の生まれる前に瑞香を我が家の戸籍に入れようと考えたが、瑞香の「婢」の身分を改善しようとしたものらしい。しかし、その具体的な方法は法的には存在せず、どうにも出来なかつたのであつ

た。

「一妻一妾は士の常なり」と学海自ら言った明治初年、学海と瑞香との描いた鮮烈な人間模様は、喜劇的な装いのうちにも、読者を真摯な思いに誘い込むところがある。二人がともに平凡な人間ではなかっただけに、それは一面、悲劇的ともいえる様相を色濃く呈するほかなかったのであった。

注

拙稿「依田学海の妾瑞香の年齢と『学海記蹤』（国文学、平成五年六月）参照。